

私の幼稚園経営

武南高志

わたしどもの町、東京都北多摩郡小金井町は、都心の東京駅から中央線で約一時間、東京西端の繁華街新宿から約三十分を要する、いわば大東京の衛星的存在の田園の町で、この三十二年七月一日現在の世帯数八、七〇九世帯、人口三五、五六三人。町の過半は田、畑、山林でしめられている土地がらである。

教育機関としては大学が三、高校一、中学校三、小学校四、ここに幼稚園が六校ある。

(私立五校、都立一校)なお保育園は六園(私立五、国立一)ある。

この地にわたしどものキリスト教会が建設

されたのは、今から二十年前で、当時は人口八千人、きわめて静かな武蔵野の一角にたった町であった。そしてこの教会の働きの一つとして、幼児の保育を地域の人たちからせまられてはじめたのは、それからまもないことであるが、それは受け身でほんのまねごとになすぎなかつた。もちろん当時はこれに類するものは、この町になかつた。それが漸次、幼稚園という形をととのえるようになったので、いわば意図しないのにそのようになってしまったという感がないでもない。したがって万事ひかえ目に、きわめて地味なやりかた

をこれまでとってきた。これが現在の経営にも続いていて、いささか消極的に過ぎるといわれるであろう。

現在は敷地二二〇坪、建物平家建六〇余坪、この建物も当初は教会の食堂だけであつたが、漸次施設を加えて、やっと第二期の予定を終り、あと約三〇坪の増築ができれば、それでひとまず計画を完了するわけであるが、それがいつの日になるかまだわからない。二、三年のうちには何とかしたいと思つている。

職員は園長一名、教諭二名(有資格者)事務職員一名。園児は二組七三名、まことに小規模の園である。しかしかつて倉橋惣三氏が、わたしに「理想的な幼稚園は七、八十名分ぐらい」といわれたことが、わたしの頭にもものこっている。この先生のことばを守つていくというのではないが、それをもってわたしの口実にはしている。園児はなるべく付近の子どもを主とし、遠くの志望者は近くの

園にいくように強くすすめているが、いろいろな関係で五人、電車とバスの通園がある。二年保育を原則とし、一年保育は補欠だけとする。三十二年四月は一年保育四名、二年保育三五名をとった。毎年一月十日から入園を受けつけて、二月上旬、幼児と保護者と面接した上で入園をきめる。今までは「園児募集」のはり紙をしたことはなかった。それはこういう小さい町のありがたさで、わりあい人の知るところとなって、定数は何とか集まっている。

設置者は教会である。その代表者が全責任を負い、教会からいっさいを任せられている。したがってその代表者はその状況を適時、週報で報告し、また年度の決算報告は教会総会に提出することになっている。今はその代表者が園長をかねているから、保育の内容容についても、適度な指示をあたえ、相談にあずかって毎日の保育をすすめている。

いうまでもないことながら、よい環境をあたえひとりひとりの心身の発達に応ずるため

には、園児ひとりびとりをよく知ること、それを親切に導くこと、その家庭、ことに母親との密接な関係をはかることにとくに力を入れている。

その後者の方法としては、

(一) 『お知らせ』半紙半分大の謄写刷の園報を毎週一回だしている。

(二) 園児各自の連絡帳(小型ノート)を備えておいて、必要あるごとにこれに書き入れてもちかえらせる。それに対して家庭の考えを記して翌日には返させる。

(三) 母の会はこのためにもっとも有力な場所であるから、入園当初の面接のときに、例会に出席するよう強く求めておく。全体の会はだいたい隔月に開く。子どもの問題を中心として、他のことはとりあげない。園長による約一時間の話ののち、連絡事項その他を話しあつて散会するが、会の時間は二時間を限度として、開会閉会の時刻を厳守する。このことはかなりよく徹底しているので、遅刻する者はきわめて少数である。閉会の時刻に

なるといったん解散し、そのあとでとくべつに用事のあるかたは残ることもあるが、これは家庭婦人に、できるだけきりつめた時間を用がたせるように、との心づかいからである。出席者は毎回九〇%程度、他から講師を招くことは年に一、二回、茶菓はださぬことにしてある。それはそのため何人かが話にあずかれなくなるし、またそういう費用は、他にまわした方がよいということからである。

(四) 全体の会合のほか、毎学期にグループ母の会を開く。これは六、七人の母親に集っていただき、親と教師との話しあいをすする。べつに教師が講演めいたことをするのではない。各自の子どもの家庭での姿、また幼稚園での姿を話しあう。この中から双方いろいろな収穫がある。そのグループの数人の集めたかたも、園児の生年月日によつたり、地域の近くの方を集めたり、またはその反対に離れた方によつたり、または個人面接に近い十分くらいずつ区切つてきてもらつたりして

いる。毎週一回ずつ開いても、全部ひとまわりするには一学期間を要する。

(五) また父の会を九月の中旬に開いたが、約半数の出席者があった。土曜日夜をこれにあて『わたしどもの教育の主張』を約一時間園長が話して、その後隔意のない懇談をしたが、いろいろ子どもを中心とする話題がでて愉快であった。夜のふけるのもしらずといった熱心さで、またこのような会合を開いてくれとの要望が出たほどで、母の会とはまた異った趣がある。実は母親からもぜひ父の会を開いて、父親にも話してくださいとのねがいがかかりでていたのであった。

こうして園児それぞれの姿とその家庭について承知することが、保育の根底にやくだっている。

一年間の経費は、三十一年度は八四四千円の決算であった。僅少な額であるが、これほどのような財源によって得られ、またどのような使途に振り向けられるかについて、一〇〇分比で示すと次の通りである。

収入		支出	
	%		%
保育料	七五	人件費	四五
入園料	五	教材教具費	二一
教材費	一〇	施設費	一〇
母の会補助	三	燃料費	三
借入金	四	厚生費	四
燃料費	二	借入金返済	五
前年繰越	一	分担金	一
計	一〇〇	研究費	二
		雑生費	六
		翌年繰越	三
		計	一〇〇

右のうち、収入の「母の会補助」は教具買入れに援けていただいたのであり、「借入金」は施設のため、「燃料費」は冬期暖房用のため、支出の「人件費」はこの年度は三人分であった。

経理上のことになると、収入の何%を人件費にあてたらよいか、ということが、かつて

は経営上あるていどの見当がついていたものだが、しかし今はどういうことになっているかしらない。参考のため、わたしの見た他の二三の園の予算を一〇〇分比で示すと次のようになる。

A園

(園長一、教諭四、助教諭一、事務一、園児二四〇)

年額 二七〇五千円

収入		支出	
	%		%
保育料	八九	人件費	六三
考査料	三	物件費	三二
入園料	七	消耗費	三
雑収入	一	雑費	二
計	一〇〇	計	一〇〇

B園

(園長兼任一、教諭一、助教諭一、事務一、

園児四〇名)

年額 五一〇千円

収入	%	支出	%
保育料	九四	人件費	六五
入園料	四	設備維持費	一六
考査料	一	保育費	一三
その他	一	その他	六
計	一〇〇	計	一〇〇

C園

(園長一、教諭二、事務一、園児八〇)

年額 九五六千円

収入	%	支出	%
保育料	八五	人件費	四五
入園料	五	研究費	二〇
後援会	七	教材費	五
その他	三	消耗費	一六
計	一〇〇	事務費	一二
		共済組合掛金	二
		計	一〇〇

このように各園の経理状態をみると、すなわち

	年額	保育料	人件費
私の園	八四四 千円	七五%	四五%
A園	二、七〇五	八九	六三
B園	五一〇	九四	六三
C園	九五六	八五	四五

このように多少の相違はあるが、保育料をもって経費の大部分をまかなわなければならぬのであるから、人件費についてもあるていどの限度があつて、その点は私立幼稚園を経営する者の苦心するところである。これは国立におけると同じく、公費をもってこれをおぎなうのと同じの比ではない。たとえば文部省の三十一年度の決算統計によると、幼稚園児一人に要した三十一年度の公費は、全国平均は年間八八〇〇円であり、東京都は一三、三二七円、最高は鳥取の一八、四八四円となっている。だから私立においては、何らかの

他の方法で優遇のみちを考慮しなければならぬ。たとえば、能率的にことを運んでできるだけ勤務時間を短縮するとか、気持よく働けるように心づかいをする、とか精神的にすぎることが、こういうことをつとめ、また同一地域の園が合同して春秋に、観劇、旅行見学などもこころみられている。

以上は、わたしども小さい園の横顔で、一般に興味をひかないことと思うけれども、しかし私立幼稚園の経営の一面を語るものとして、あえて、すすめられるままに筆をとつたのである。(小金井教会幼稚園園長)

上野・武田・玉越・宮内・
小山田各先生執筆
幼稚園教育要領の実践

定価二〇〇円

丁二四円

フレーベル館発行